

住谷一彦先生記念号によせて

住谷一彦先生は、1957年4月に都立大学人文学部助手から本学経済学部にて専任講師として迎えられ、以来1990年3月定年退職されるまで、33年の長きにわたって本学ならびに経済学部の発展のために尽力され、学問の府としての本学の名声を大いに高められました。

先生は、経済学部において、社会思想史の講義を担当されて他学部の学生をも含む多くの学生の教育に努められる一方、ゼミナール・大学院博士課程における懇篤な研究指導を通じて外国人留学生をも含めて多くの優れた研究者を育成されました。この間、1971年4月から73年3月まで経済学科長、1977年4月から79年3月まで経済学部長兼大学院経済学研究科委員長ならびに立教学院評議員を歴任されて、本学の教育・研究の拡充のために意を注がれました。とりわけ、経済学科長在任中は、「学園紛争」の余燼の中で教育・研究体制の改革に力を傾けられました。

先生の研究業績は、多数の著作に集大成されております。それらは、先生の研究の進展・深化という観点から、それぞれの時期に取り組まれた3つのグループに大別することができます。すなわち、まず、第1は長野県北佐久郡の農村調査およびマルクスの共同体論の研究、リストとヴェーバーのドイツ土地制度論の分析、ヴェーバーの理論（とくにその「禁欲的エートス」論）の研究などを通じての共同体解体・資本主義（市民社会）発展に関する比較社会学的分析および思想史的解明（学位論文『共同体の史的構造論』、有斐閣、1963年。『リストとヴェーバー』、未来社、1963年。『マックス・ヴェーバー』、日本放送協会出版部、1970年）であります。次いで、第2は、毛沢東や河上肇の思想のヴェーバー宗教社会学的視角からの分析による現代世界や日本「近代」の思想史的意義の解明（『思想史としての現代』、筑摩書房、1974年。『河上肇の思想』、未来社、1976年）であります。さらに、第3は長年にわたる沖縄諸島・オーストリア農村の文化人類学的調査や日本民俗学・民族学の研究成果の検討に基づいた日本人の神観念・宗教思想の分析（『南西諸島の神観念』、共著、未来社、1977年。『日本の意識』、岩波書店、1983年。『歴史民族学ノート』、未来社、1983年。『Das Japantum』、名著刊行会、1987年）であります。このように展開された先生の研究は、日本近代社会（とくに家族・共同体・土地制度）・文化（その中核としての神観念）の歴史的・構造的特質を西欧社会・文化のそれとの対比において解明するという問題を、多層かつ多角的な視座から最も枢要な問題領

域を有機的に関連させ、各対象に即した多様な分析方法を駆使して追究されたものであります。

先生の研究は、全体として、日本社会・文化研究における1つの高峰をなすものでありますが、その個々の業績も、一様に、当該問題領域に開拓的で有意義な分析と解明を加えたものと高い評価を保持されております。とりわけ、先生がこれまでの研究の結晶として、造語とともに提示された「日本的エートス(Das Japantum)」という概念は、今後学界の貴重な共有財産として論議の的となり続けるであります。

住谷先生と長い間の共同の研究において、「強い緊張と重い精神的負担」を共有された松田智雄先生は、『ゼミナール讃』（住谷ゼミナール30周年記念）に寄せられた「『世界』の創成をお祝いすることば」のなかで、住谷一彦先生の学的領域と理論の全体像について次のように剔出されている。

「私がひとつの『世界』だと言った住谷先生の領域は、その前に立つと私には、余りにも遡大であるようにみえた。しかし、住谷先生の学的領域は歴史学、文化人類学、——そして焦点を、共同体論、歴史民族学に定めながら、理論的な礎をマックス・ウェーバーに沈下しながら、マルクスへのメスを刻み入れることも怠らない。」

住谷先生の学会および外国との研究交流における活躍もまた目覚ましいものであります。日本民族学会評議員、比較家族史学会幹事、マックス・ウェーバーの会代表幹事、東京河上会代表幹事として各学会の発展のために長年活動されています。また、1958年のヴィーン大学への留学以来、オーストリアやドイツの研究者たちとの交流を深められ、ケルン大学（1968年、75年）やヴィーン大学（1976年）で客員教授として日本市民社会思想史や日本のヴェーバー研究についての講義をされたのをはじめ、オーストリア農村の現地研究者との共同調査や日本文化に関する各種国際会議への参加など、多方面にわたって、わが国の当該研究の国際化および西欧の当該研究の摂取と普及に努めてられました。とくに、多数の翻訳を通じてのドイツにおけるヴェーバー研究の紹介は特筆すべきものであります。

先生は、このように本学経済学部教授としてわが国の当該諸学会において主導的な活躍をなされ、大学としての本学の権威を一層高めることに多大の貢献を果たしてられました。

立教大学は、先生の学術上、教育上の功績の顕著なことにより、1990年7月、先生に名誉教授の称号を贈りました。

先生はいま定年退職の時期を迎えられましたが、経済学部の発展に尽してられ

ました先生の御功績を永くとどめるために、本号を先生の記念号といたします。

先生のこんごの御健康と御活躍を祈念すると同時に、これまでと変わらぬ御助力を本学と経済学部のために賜わりますようお願いいたします。

1990年10月

経済学部長 丸 山 恵 也